○御製　御題（植物苑）

我園にしげりあひけりとつくにの草木の苗もおほしたつれば

晩蒔の後れて生る苗なれど仇にはならぬたのみとぞ聞く　大江千里

保食（ウケモチ）の神の命の御身よりぞ成出そめしその田なつ物　本居太平

天つ神種とり得ましつくりそめ民に教へし田なつ物かも　同

稻種も粟麥豆も黍稗も小豆さゝげも神にぞましける　同

神の世の神の御身より生ひいでゝたえず枯せず生出る種　同

不足なる事を怠へよ何時も恨みんことはやすき世の中　荒木田守武

○種蒔歌

米蒔けば米の草生て米の花咲きつゝ米のみのる世の中　二宮尊德

蒔米と生立米は異なれど實ればもとの米とこそなれ　同

米の實は根も米なれば種も米枝も葉も米花も實も米　同

米の實は又來ん年も米生て老朽るとも米は米なり　同

去年の實は今年の種となりにけり今年の稔り來ん年の種　同

蒔く種の直ちに生て育ちつゝ花と見る間に實るくさ〳〵　同

（此外麥、梅、松、善、惡等一百種に付て各々六首づゝの歌を繰返し煩はしきを厭はず諭されてある、たとへば、麥蒔けば、蒔く麥と、麥の實は、麥の實は、去年の實は、蒔く種は、云々六百首みな同文同体である、煩はしければ畧す。）（善惡應報鑑）

春の野に芽出づる草木をよく見れば去ぬる秋の種にぞありける　二宮尊德

菜か罌粟（ケシ）か種まく手元わかねども花咲春はいちじるき哉　同

丹誠は誰れ知らねどもおのづから秋の實りのまさる數々　同

蒔き植て時に耕し耘りて實り待つ身ぞたのしかりける　同

蒔けば生え植ればそだつ艸と木ぞ誠の道の例しなりける　福住正兄

恐れても恐るべきなり蒔く種の必ずおふる天地の道　同

蒔ばはえ蒔かねばはえぬ善惡は人は知らねど種が正直

○不吉らしく見えて悦びの歌

淺ましや去年より今年劣りつゝ孫や子供に後れこそすれ

（之は忌はしく明ゆれども麻を取る祝ひ歌である、讀みかへて見ると斯くなる。）（畸人百人一首）

麻增や去年より今年苧取りつゝ孫や子供に苧くれこそすれ

○農家心得の歌（穂に穂）

軒下は耳に替へても手に入よ足もぬらさず暮さるゝなり（近作）

惣作のよきと惡しきはつなぎ置く牛一疋の强弱にあり（大牛）

給金は一錢にてもたんとやれ男次第で加地子百倍（雇人）

借錢を質に置ても買たまへ道具次第で仕事一倍（道具）

御年貢は明日と云はずに持て行け夜の干べりは計られぬ也（年貢）

よの人が無理を云ふなら打殺せ前田の草の種も殘さず（喧嘩）

人の地の陰となる木は切り給へ云はで苦しむ胸を察して（陰地木）

境目は隨分取られ取らるれば天の惠みで末は繁昌（地境）

飢饉年たとひ自身に飢ずとも粥ざうすゐで喰のばせかし（飢饉）

休め地は度々掘りて日にさらせ土はやくのが藥なりけり（休地）

作道は慾をはなれて作り置け作も痛まず通るにもよし（作道）

金山の掘り子せんより溝を掘れ金も出るなり見ても氣味よし（惡水ヌキ）

植る物まづ地ごしらへが大事なり篩にかけよ絹の篩に（地コシラヘ）

植物はたゞ一品と定むべし手間ひま入らず取實一倍（唯一品）

中うちは昨日打とも今日もうて土は乾くが藥なりけり（中打）

水肥は小生（コヤシ）の時に油斷すな少し照ても日に痛むなり（肥入レ樣）

惣作のよきと悪しきは作り置く苗一株のよしあしにあり（苗作）
刈るときは人に後れて刈りたまへ桝目も多く春減もなし（收獲）
幾度もあら肥入て深く掘れほるにあきなし肥にあきなし（田ノ下拵ヘ）
田植前麥藁澤山芝澤山必ず秋の米も澤山麥藁）
苗の色墨でなりとも黒めかし赤みだちたる苗はやくたい（籾種）
苗代の實干するなら汐斷すな畦には烏空に雨雲（實干）
早稲は猶片時も早く植て取れ跡に出來たつ日數なければ（若苗）
代（シロ）の時みぢん高下があるならば苗をぬきても代を仕直せ（苗代）
苗とらば取るより早く植て行け瞬きの間も休みなき樣に（早ク植）

（田の植方（肥え地は薄く瘠地はあつくと心得べし、田を植るに十五の忌み事あり）

一、代をかき間ありて植る悪し　二、地ならし高下ある悪し

三、めつた植悪し　四、苗ごしを折る悪し

五、苗を別るに多少ある悪し　六、足あとに植る悪し

七、沼田深く押込む悪し　八、老ひ苗悪し

九、荒れ地ある悪し　十、植かさぬる悪し

十一、交り苗悪し　十二、稗ある悪し

十三、木のぼり苗悪し　十四、植田を干す悪し

十五、有りつかぬ中田のなかへ入る悪し。

一の悪しきに五升の損あり十五皆悪き時は七斗五升の損なり。）

稗にさへ心を盡し植るものを五穀の王をつゝきこむとは
苗の殘りふみこむ事の恐ろしや人の生命の親と知らでや（苗ステナ）
田の草はまづ六遍と相定めそれより上は力一ぱい（田ノ草）
ぬり干は手溝を付て水落せぬると其まゝ白くなる樣に（ヌリ干）
少しでも雨雲見たら油斷すな夏の夕立稻の人參（夕立）
少し穗のかたぶいた時秋田ほせ爪のあとにも水氣なき樣（落シ水）

稻刈は必ず急ぐ事てなし粒々神のやどりたまへば（稻刈）
綿の地はまづ麥蒔に溝を掘れ綿の時には溝はほられず（綿地）
種あてがい一反一貫六百目植るに念を入るゝなりけり（綿實）
綿植るば地山に溝しふみかため少しの水も含ませぬなり（綿ノ植方）
五月には綿の中打あさくせよたゞ庭草をけづる如くに（綿ノ中打）
綿の草其日〳〵に取りつくせ朝は夜から夜は寢るまで（綿ノ草取）
水肥はわきよりかけて根に流せしんにかけるは殺生な事（綿ノ肥）
綿の水土用のうちに限るなり土用すぎての水は大毒（綿ノ水）
綿のしんまづ延るだけ延し置き大小一時殘りなく切れ（綿ノ眞）
綿つみは片房にても摘て取れ塵がつもりて山となるなり（綿摘ミ）
大麥は坊主はだかの一品よ數々植るは邪魔なものなり（麥）

（坊主ハダカは少し出來は惡しけれども、よく作るときは大に宜し、また早く取れる故田植の邪魔にならぬ。）

麥蒔は早く陰地は植て取れ後るゝ時は麥種もなし（麥蒔）
種をおろす人は其日の司なり作のよしあし是に限れば
何かなし鎌をふどしに酒を買へ日よりに蒔た麥は十分

（牛飼に手をつき、鼻そひて酒買ふと云ふも此事である。）

一反に足らぬ持地も惡田も作り樣にて麥は山ほど
埒明ぬ熊手て草を取らんより小生（コオヒ）の時にさらへがけよし
中打は麥がほしさに打つてなしめざす所は綿と夏もの
朝刈ると晩にかるとの違ひにて幾萬粒の損德がありー
用立たぬ麥藁ほして何にする田に入れて見よ稻は十分

梅咲くや枝は天下に十文字　勝安芳

まづ一ぷくと植付た畑草畑
村女房小便をやるにも箕の手附
一反で四五反とれる綿畑
乳を余す樣苗代の落し水

六　花實色々（一名雜の雜）

○御製　御題（竹）

笛となり弓矢となりて呉竹のよはさま〳〵にかはりゆくかな

○皇后宮御歌

もつ人の心によりて寶とも仇ともなるは黄金なりけり

物思ひ深さ較べに來て見れば夏のしげりも物ならなくに（蜻蛉日紀）

世の中は夢と思ふも夢なれや夢を迷ひと云ふも夢なり　夢窓國師

夢の世と思ふも今は迷ひ哉もとのうつゝの無しと思へば

重くせん物とも知らず世の中にたやすげなるは起證誓文　荒木田守武

上が上かぎりもあらじ我よりも下の下なる人を見るべく　伊藤仁齋

盤上を左のみ好むはうつけ者人の會釋に折ふしはよし　最明寺入道

碁將碁も知ぬは惡し知りて後家職の邪魔にせぬ程がよし

碁將碁もたま〳〵はよし常の日に好けば用事の妨となる

能なしのくせに人より差出れば度々耻をかくものと知れ

ろく〳〵に仕なさぬ藝はなまじひに耻かき草と思へ皆人

得ぬ事を得たり顔する人にこそ仕落も耻もある物と知れ

○寛文七年吉野の山深く住みて

此春は吉野の山の山人となりてこそ見れ花の色香を　能澤蕃山

○寛文八年閉居にて。

つたへ來て春は神代に變らぬを人の心ぞ昔には似ぬ　同

同じ江に眠る鷗の心をも知らで千鳥のたちゐなくらむ　同

○貞享四年禁錮せられ翌年春歸雁を見て。

老の身の見んことかたき故里に春待ち得てや歸る雁が根　同

ゆくかりに關はなくとも公の誡めあれば文もつたへじ　同

○和州三輪の布袋屋某は同國並松の周齊子の門人である、ある年の春

花とのみ見しはふもとの心にて雲わけ登るみ吉野の山

此歌をよみて師に添削を乞ひしに、近頃の秀作なりとて稱譽を得たりしかば、ある時京師に上るついでに冷泉爲村卿に自詠を見せしに、さて〳〵骨を折りつらん

されども歌にならずと仰せらる、某は肝を消し暫時は默してのみ居たが漸くにして首をあげ御添削を下されなば歌にやなり申さんやと云ふ、卿は如何にもとて筆とり添削したまふを見れば（東關子）

白雲と見しはふもとの心にて花わけ登るみ吉野の山

○旅順開城の約成るや水師營に於て乃木將軍とステッセルは互に其軍の勇を賞し隔意なきもの〻如し、中村少將は此會見の狀を見て。

あひ見ては人に怨みはなかりけり床しさのみは武夫の道

山々の一度に笑ふ雪解にそこは沓々こゝは下駄〳〵　山東京傳

都への土産にしたや不二の山片荷に田子の浦が持てれば　坂村利安

○牧年と卜養とは交り深し、ある時庭の柿を贈りて狂歌をと望ば卜養は。

御所望の歌は澁りて出ざれば耻をばかきてへたの名を取る

又十三夜に牧年の宅に琴の會あり、卜養も參るべき約束なりしが病の爲斷りて行さりければ牧年は。

名は四方に一ぱいみちて有ながら今宵出ぬはうそ月の空

ト養返し（萬代一笔）

音たてゝ彈く琴の音の十三夜今宵は内にころりんと寢る

○近戀

板塀のうち見るばかり近ければ針の折なる文もやられず　十返舍一九

天の原ふりさけ見れば目の上にかゝる霞や遠山の眉　同

物ひとへ隔てゝ聞けば十七の鬼のひくとは見えぬ琴の音　同

ことわざに酒は憂の玉はゞきはくまでも飲む跡引上戸　同

○狐拳の戯賛

生酔が三人よれば騒がしくあたりかまはぬ鐵鉋の拳　同

村雲をよその時雨と思ひしに袖の上にもめぐり來にけり

○大綱和尚瓢簞の戯賛に曰く、

瓢々、汝眞瓜の位もなく、西瓜の暑をはらふ德もなし、然ども氣の輕く中空しくして無欲なれば仙人も汝を友として酒を入れて腰に携へ、あるは駒を出して樂めり、汝瓜の類にぬて庖丁の難にあはざるは智なり、鮓を押へてのがさしむるは仁也、羽柴公の馬印となりて强敵をくだくは勇也、汝性は善なりといふべし。

用意せし鰹節さへやせるほど日數もかゝる旅のはてなき

浮々と暮す樣でも瓢簞の胸のあたりにしめくゝりあり

旅人も錢におあしの名のあれば大事にあゆむ長の道中　春日野守

住なれし都は野邊の夕ひばりあがるを見てもおつる涙よ　飯尾參左衛門

（應仁の亂後京師は草茫々として雲雀さへ市中より飛上るのを見て感慨に堪ずこの歌を詠だのである。）

○志水伯耆守清久は若年の時織田信長と戰ひ敗れ兵糧つきて近江の鏡山を過るとき。

駒なべていざ見てゆかむ鏡山飯食はぬ身の痩やしつると

いとせめて戀しきときはぬば玉の夜の衣を反してぞぬる（古今集）

（慰しき人を夢に見んと思へば双六盤を枕にして衣をかへして夢の妙童芹を念ずれば必ず夢に見ると云ふ。）（消閑雑話）

○鼻なき夫と髮なき婦

三輪の山杉の木立と聞つれど、かみのなきこそ淋しかりけれ（夫）
吉野山木々の梢は春なれど、はなのなきこそ淋しかりけれ（妻返し）
世の中に貧乏人も多けれど、三人の中には、ながみもなし（仲人）
いざなきの末は何兵衛何右衛門本を正せば由緒あるもの

○辭世

借錢の山に住む身の靜けさは二季より外に訪ふ人もなし　大根太木
願くはわれ後の世の風となりて月をば照せ花は散さじ　貞德
我ながら見ちがへる程痩にけり何喰ぬ顏に人目忍べど　奈良柴々廣

○文化の始め頃神田明神下に油石灰を業とする清水忠右衛門、狂名を壁仲塗と稱する人あり、ある年の始に蜀山人同人の家を訪ふ年酒を出し鰈の煮たるを出したるに、箸こゝりて杉箸折れければ忠右衛門は色を失ふを蜀山人取りあへず

杉箸のをれとお前の中なれば目出度（メデタ）かれいのにいこにこゝり　蜀山人

○蜀山人ある時田安侯邸に招かれ園の中なる九段の高臺に上り此風景一首をと望まれければ。

雪月花きつと受合申候よつてくだんの上のお物見　同

侯は感賞して唐桟の袴地と八丈縞の反物を賜はりければまた

寢惚にはすぎたるものが二つあり唐の袴にほんの八丈　同
西行も牛も遊女も何もかも土の化けたる稻荷街道
地獄いや極樂もいや娑婆もいやうまれるもいや死ぬるのもいや
春は花夏郭公秋は月冬雪さえて涼しかりけり
取ればうし取らねば人の數ならず捨つべきものは弓矢なり鳧

（下野國藥師寺次郎左衛門藤原公義の歌である、大將足利尊氏に從ひ官軍に向ひて

弓引くはうし、さればとて出陣せず引籠り居れば臆病未練なりと云はれん、所詮弓矢を捨てゝ佛門に入るに如かずとて僧となる、元可法師とは其人の事である。）

（嘉多比沙志）

○孔子を櫛に見立てたる歌

黒髪の亂れがちなる理りを解きわけしてふくしぞ尊き　孔子

かきみだし〳〵たる黒髪をすち目正しくときさばきけり

○辨慶の畫に

時にかなふ七つ道具は人の情むさしと云ふは私して候

親もなし妻なし子なし版木なし金もなければ死にたくもなし　林子平

（六無齊の名の起原である）

○一本亭芙蓉花と云ふ狂歌師ありて、淺草寺に一面の繪馬を献ぐ其面に寶珠を畫きて上に一首の狂歌を添へた

磨いたら磨いただけは光るなり性根玉でも何の玉でも

何人なりけん其繪馬の下に一首の落首を張つた

磨いても磨いたゞけは光るまじこんな狂歌の性根玉では

（狂歌叢話）

此狂歌に付て京都にもまた落首があつた

光ろかの蒟蒻玉も藍玉もたどん玉でもふぐり玉でも

○春日局の夫藤原公宗が罪を犯しゝに子を生みたるは上に憚りありとて仁和寺の側に假住居せしに其子を殺せよとのかしこき仰せにて使の者來りければ此歌をよみて其難を救へり

いつはりを糺の森におく露のきえしにつけてぬるゝ袖哉　春日局

曲りても杓子は物を掬ふなり直でも物をつぶすりこ木

世の中は御ひいき漏の多ければ下手も上手も人の言ひなし

世の中に奇妙不思議はなきものぞふしぎと云へばみんな奇妙ぞ

傘のさしたるとがはなけれども人にはられて雨に打るゝ

酒くはず鰻ものまずあの人はなにしに世には生れきつ覽　小林樂川

○曾呂利の門に粘り置し落首に（曾呂利は刀の鞘師なりき。）

柄の間もそばはなたじと召れけり君が心に合口の鞘

何事も遣ひ様にて竹の子の笠ともなれば草履ともなる　水戸黄門

毒多き毒の中にも氣の毒は何より毒なものでこそあれ

餘の毒は口から入れど氣の毒は目から鼻から耳からも入る

○永祿三年七月十三日古河公方晴氏卿御他界あり、御臺所（北條氏綱息女）御嘆きのあまり六字の名號を句の上に置たる歌を詠みたまふ。

ナきあとをナげくばかりのナみだ川ナがれの末はナがき瀧津瀬

ムつまじくムすぶ契りのムつごともムなしき空にムらさきの雲

アはれさをアとに殘してアちきなきアけぼの照すアりあけの月

こつしほにこのりの船のこなれざほこだの誓とこはなりにけり

タれもみなタのみを掛よタれんなくタりきの心タゞ佛なる

フたつなきフしぎの誓願フしぎやなフかき願ぞフだいとはなる

○高野山の宥快法師が求道自修したまふ所へ氣高き女人が入來つて其燈を挑て曉はまだはるかなり高野山猶かゝげてよ法の燈火

やがて姿を失し給ふ、後法師遷化有んとしまふときまた彼女人出顯して（續著聞集）

かりそめの雲かくれとは思へども見えねば惜き有明の月

○燕坂長範盗みの爲に高野に登りしが、思の外に菩提心を起して、後世のしるしにもとて向齒を打かき骨堂へ納るとて（新著聞集）

高野山峯のあらしははげしくもこの齒は殘れ後の形見に

按ずるに室町殿物語に普光院殿高野山に參りたまひて我も存命中に納骨せんとて弊を以て齒を落し骨堂に納め給ひて

高野山おろす嵐のはげしくも此の齒は殘れ後の世までも

（此の話の誤り傳へられたるものてがなあらう。）（燕石雜志）

○左の歌は見方によりては戀の歌とも見るべしされども之は議會の開設を待遠しく思ひて詠る歌である。

相見んと契る言葉のなかりせばかばかり深く物は思はじ　小野梓

欲暖猶寒節序遲、朝々屈指數花期、期々未到意先到、爲賦靈江春色詩。（國憲汎論）

○鬼の念佛の喘聲を乞はれければ

目に見へぬ心の内の角までもほつきと折れて鬼の念佛　浮世又平

誰もこそ人は裸で貴とけれそれが生れのまゝの元直ぞ

山里は松の聲のみきゝなれて風ふかぬ日はさびしかり鳧　蓮月尼

世の中は金と女が敵なりどうぞかたきに廻り合ひたい

君をわが思はざりせば我を君思はんとしも思はましやは

唐崎の松にもあらず日本にて二本にあらず一本の松　三馱

言絶えて言々絶えて言絶えてア、と云ふより言の葉もなし

此樣にひたと祈れど逢せぬは合せたる手のかひもなかりき

○太田道灌が遊獵の途時雨に遇て民家に入り雨具を求めしに少女の山吹の花を捧ぐるありし云々の傳說は全く小說である、遊獵の途時雨に遇ひて民家に雨具を求めしに老女の聲にて山吹の歌を詠ずるものありしを道灌大に感じて扶持を遣はしたと云ふ話を誤り傳へし物であらう、道灌は九歲の時より建長寺に入て歌道を學で居る十幾才の時小机の城を攻るとき

手習は先小机が初めなりいろはにほへどちりにくゝせん　太田道灌

中々に人里近くなりにけり餘りに山の奥をたづねて

思はじと思ふも物を思ふなり思はじとだに思はじや君

月も日も西へ〳〵と入相のかねて知らする極樂のみち

村雲よ邪魔がしたくば駈拔けて月の入るべき山に塞がれ　式亭三馬

種ありて數は樣々變り咲きいく品玉か朝顏の花　同

下駄足駄作り變れば釋迦阿彌陀變れば變る物にぞ有ける

（無明實性即佛性、幻化空身即法身、法身覺了無一物、本來自淨天眞佛。）
（永嘉大師）

持たぬ故減ず口とは見ゆれども金が有なら人にやりたや

町人の藝は下手こそ上手なれ上手になれば家がへたばる

金拾ふ夢は夢にて夢のうちにはこすると見し夢は正夢

（堀河百首題狂歌集）（燕石襍志）

事多き事の中にも何よりの事といはるゝが何より事

朝顔はつぼみに筆の樣見せて〳〵とかきつたひぬる　佐々木文山

世の中にたえて女のなかりせば男の心のどけからまし

短冊につれなき返し見てじより落る涙もふたくだりなり　一志庵外成

武夫と物貰とのあしらひはどほれとほれのすみ濁りにて

○芭蕉が諸國行脚の際越後國柏崎にてある百姓の家に宿りしに其家の子息重次郎と云ふもの性來の出すぎもので喧嘩の絶間なく何か伜に教訓となるべき句をと乞はれて（歌俳百撰）

道ばたの槿（ムクゲ）は馬に喰はれけり　丈草

我事と鰌のにげし根芹かな

○雪月花を一句につゞめたる句

月雪も左こそと花の宮所　紀逸

九年何苦界十年花の春　祇空

（半面遊女遊廓の畫讃である。）（江都著聞集）

青二才でも廓では賣れた顏

兩爲と云ふたと聞て乳をくれず

泣く子より泣せるやつが菓子を喰ひ

俗名で呼べば藥種は安くなり

ゆつたりと碁の強さうな鼻の下
目についた女房今は鼻につき
憎まれて思のまゝに飛ぶからす
其後はあさづけ和尚ばかり出來
子が一人出來てそれなりけりになり
和尚さま苦しいわけは二タ世帶
耳は馬面は蛙に母ごまり

七　餘興

○豐臣秀吉秘藏せる松の枯れし時

御秘藏の御庭の松は枯れにけり千代の齡を君にゆづりて　曾呂利新左衛門

○文化年中竹橋の松が枝が風もなきに折れたるを人々異變の兆として云ひはやせしが蜀山人は一首

千代の松折れなば臼と杵にせんつくとも盡きじ君が齡は　蜀山人

○年賀の祝の時壽の餅が四十九ありけるを不興に思へるとき。

七つ宛七福神に配らばや數も四十九あらう賀の餅　同

○八十の賀を祝ひて「松契千歳」の題にて

八十の賀らくた老爺生き延て又も齡を松に契るか　同

○樂翁公當路の時の落首

黑棒が泥棒どもを逐まはし後に殘るはしはんぼうなり

○ある狂歌師おのが歌集の點を乞ひて後其集の返されけるを見るに一首も點なくし冊末に記してありし歌（甲子夜話）

敷島の道を横ぎるかま鼬てんになるべき言の葉もなし

筆とりて天窓かく山五十年男なりやこそなかね半七　中根半七

○甲州鹽山の法身和尚の妹にいと女と云があつた、絶世の美人であつたが人々競ふて此花を手折らんとするのでいと女は決心して鐵火を其面にあて、醜女となり世塵を避けて一生を終つた其時の歌。（歌俳百撰）

我が面を恨に焼くぞ鹽の山蜑のたく火と人や見るらん

○由良播磨守京都にて御門跡より馬を借り其返禮に金百疋贈りけるを返して（筆まめ）

一疋の馬さへなくて百疋は由良ぬ事なり氣を播磨どの

○利久庭を作る心得の歌（大八）

樫の柴もみぢながらにちりつもる奥山寺の庭ぞさびしき

（遠州は（仝））

○夕月夜海少しあるる木の間かな

○幸田露伴氏かつて北海道より東京に還らんとし陸前の鹽竈に來りしに懷中僅か一錢を餘すのみ、其一錢を鹽竈神社に賽して

から〳〵と辛ちき浮世の鹽竈でせんじつめたり懷の中幸田露伴

また原町にて

宮城野の萩の餅さへ食へぬ身のはらの減るのを何と仙臺　同

○狂歌師和調亭末永が近所の質屋に行きて金子を借り來り酒を買ひて飲み居たるに質屋より典物を求むるの使者來れども何もあらざりければ

質草はみな枯れ果てゝおく物は袖に涙の露ばかりなり

渡るより深くぞたのむ鞠子川親の仇にあふせと思へば　曾我時致

五月雨にあさせも知らぬ鞠子川なみに爭ふ我涙かな　曾我祐成

○豐太閤一日徒然のあまり臣下の面々を召して大なることを歌によませたまふ、細川玄旨法印は

富士山を枕となしてねころべば足は堅田の浦にこそあれ

○福島正則は

日の本にはびこる程の梅の花大地に響く鶯の聲

○加藤嘉明は

大海を酒のかはりに飲ほしてあたりの山をつまみ食する

○加藤清正は

須彌山に腰打かけて世界をばのめど咽にさはらざりけり

○曾呂利新左衛門は

須彌に腰かけて世界を呑む人を小指の先ではねとばし鳧

○嵯峨天皇の時片假名の「子の文字十二書きて小野篁に讀せたるに（宇治拾遺）

ねこの子の子猫としゝの子のこしゝ

○今は昔聚樂にて金剛太夫の勸進能ありて芝居錢三十文づゝ取りければ京童の落首（狂歌叢話）

金剛は二足三文するものを三十するはせきだ太夫か

小田苅りし後に案山子の朽ぬるは烏やおとせし報なるらむ　赤塚龍岱

○名山勝地を遊び回るを人々今西行と云ふを聞きて

西行に姿ばかりは似たれども心は雪と墨染の袖　似雲法師

明ぬれば暮るゝと知らぬはかなさよ有漏より無漏に入相の鐘　無能上人

○淺草藏前の札差に金を借りにやること度々なれど貸さゞりければ

九十九夜ふかくさならぬ淺草へかよひて出來ぬ少々の金　蜀山人

○米屋へ使をやれども送り來らず。

二斗三斗四斗をやるのにまだこぬかうそを搗屋て腹が立臼　同

○碓氷峠にて詠る歌なりと云ふ數字歌

八萬三千八三六九三三四九一八二四五十二四六百四億四百

（譯、山道は寒くさみしく一つ家に夜毎に白くもゝよ置く霜。）

○文字の清濁の歌。

ある人烏丸光廣卿に狂歌を乞ひければ卿は直に筆を執て

庭の雪に我跡つけて出行けば訪はれにけりと人や見る覽

乞ひし人之は狂歌なりやと問へば卿はうなづきて文字を濁りて讀ば狂歌となるべしと仰せらるゝ即ち

庭の雪に我跡つけて出行ば飛ばれにけりと人や見るらむ

我耳の遠くなりしは年を經て聞えぬ歌をよみし報ひか　季鷹

我耳の遠くなりしは年を經てきかぬ藥を盛りし報ひか　醫師

○二ッ三ッ四ッの歌。

遠山の青葉交りの遲櫻あらはれて見ゆ二ッ三ッ四ッ　正三位家隆

忍れば人には見せぬ玉章に讀れぬ文字の二ッ三ッ四ッ　俊成卿

棚橋の短きほどぞ知られける駒の足音二ッ三ッ四ッ　定家卿

○柿本人麿のほのぼのとの歌は實に其句調なだらかなりとして名あり、すべて歌は口にとなへてなだらかならぬは下品なるものなるが此歌は格別て句を上下に轉倒しても口のうちにさはらず不思議のことである一首十躰の口訣として知られて居る。（消閑雜話）

ほの〳〵と明石の浦の朝霧に島かくれ行く舟をしぞ思ふ

ほの〳〵と島かくれ行く朝霧に明石の浦の舟をしぞ思ふ

ほの〳〵と舟をしぞ思ふ朝霧に明石の浦の島かくれゆく

ほの〳〵と明石の浦の朝霧に舟をしぞ思ふ島かくれゆく

ほの〳〵と島かけれ行く朝霧に舟をしぞ思ふ明石の浦の

朝霧に島かくれ行くほの〳〵と明石の浦の舟をしぞ思ふ

朝霧に明石の浦のほの〳〵と島かくれ行く舟をしぞ思ふ

朝霧に舟をしぞ思ふほの〳〵と明石の浦の島かくれゆく

朝霧に舟をしぞ思ふほの〳〵と島かくれゆく明石の浦の

朝霧に明石の浦のほの〳〵と舟をしぞ思ふ島かくれ行く

（此歌ほど句調のよきは珍しきもので「月やあらぬ春やむかし」の歌は五体の變化をなすと云へども畧す。）

（ほの〳〵の歌は人麿の作にあらず、今昔物語に小野篁隱岐國へ流さるゝ時船中にて詠しとある。）（閑窓瑣談）

○千代姫君御參宮の日大學頭の館より出火して芝區まで延燒せしかば或者

大學が孟子わけなき火を出してちんじ中庸論語道斷
（此狂歌京都に聞えしが或公家衆「火を出しては惡し四書こないとは可笑しかるべし」と仰られけると。）（大八）

○辨慶が月と云へる難題に或人よめる（大八）

長刀をいづくも同じ武藏坊いくさより出でい草にぞ入る

○ある僧綸旨を戴かんとて舟にて上京中貯への金を盜賊の爲めに取られ、望みかなはずして歸るとき詠める。（大八）

苦しみの海を渡れば墨染の袖にもかゝる沖つ白波

○酒の歌（世說雜記）

世の憂さを忘るゝ爲の酒なれば飲て暮すが一升の德（一升）
極樂はしま黃金と聞くけれど酒なき國をなに二升ぞや（二升）
雨風の夜半をも何の厭ひなく酒と聞たらいそぎ三升（三升）
諸藝には敎へなうては叶ふまじ酒許りには四升いるまい（四升）
あへおさへ手元見ようと無理酒を一つ助るも五升なり鳧（五升）
我人も養生に飲む酒なれば程よく飲て面し六升（六升）
身の程をわきまへて飲む酒なれば七升までの勘當はなし（七升）
陶淵明李白の樣に酒のんで後の世までも名をば八升（八升）
酒のんで怒らず泣かず賑はしく笑ふ上戸をふ九升といふ（九升）
長命の藥にもなる酒なれば飲て樂しめ世界一統（一斗）
下戸どもが一生知らぬうまみかな初一杯酔ざめの水　活々坊久悅
戒めの酒を飲むのが咎ならば酒の地獄に落せ佛め　湯淺某

○辭世

われ死なば酒屋の甕の下にいけよ若や雫のもりやせんなん　守屋仙庵
咲く時は花の數にもあらねども散るにはもれぬ山櫻かな　凸凹山人

○宗幸老人の米の字の祝ひに。（我面白）

ら へ ま ま

君がとしの　米　ひとりたゞ

ま　ま　ま

ま　ま　ま

（讀み方は、「君が年の米にあやかり申すべい、いく千世こめてかぎりあるまい」）

○猫兒眸子の歌

六ッ丸く五七卯に四ッ八ッは柿の核にて九ッは針
わたぬきのわの字を取れば狸故小袖も化けて袷とぞなる　手柄岡持
水心なければ質も流されて袷のぬき手きるもきられず
雪とのみ古歌にも詠みし卯の花も我目には只鹽らしく見ゆ

○木魚の贊

本來は魚なるか又木なるかとせなかたゝけば木々（ボクボク）と云ふ

○國名及び鳥、蟲の名を隱し題して詠る歌（莫告藻）（正德三年法王御製とも云。）

阿波　甲斐　美濃　紀伊　駿河　隱岐　播津　志摩　山城　和泉
あは雪もふるかひなみのきいするがおきつしまやましろくいつみん

鷺　鳩　鶯　鳩　雁　鶏　駒鳥　雀　鶴
さぎにほふ花をしみはとかりころもすそのをかけてこますゝめつる

鼈馬　蜘　蝿　虱　蚤　紙蟲　蛙　蚊　蟻　蜂
いとゝくもはいのしらみて袖にのみしみかへるかのありしはちす葉

○皷の手口傳の歌　（男重寶記）

いさうなる手をうちかけば取あけてすぐにゆきつく地を忘れなよ

○小野木縫殿介言卿の方に歌の會あり春雨降ければ夫人のよめる

月さへも漏る宿なれば春雨のふるまふ物もなかりけるかな

○雨の降る風の歌。

五月西夏は南に秋は北いつも東風にて雨降ると知れ

○道三國手のたはれ歌に　（北邊隨筆）

醫者は只下手も上手もなかりけりひいき〳〵に時の仕合

○曾呂利新左衞門の大と小との歌。

天と地を團子に丸め手にのせてぐつと飲め共咽に障らず（大）

蟻の子が流す泪の中島でいさごを取りて千々に碎かん（小）

久方の空にうらみはなくもがな照曇りなきおぼろ夜の月　不怨齋

○寛政七年（卯年）の秋木星月をぬけし事あり、人々品々に吉凶を評し恐れ論じける

が橋家仙院のよめる　（耳囊）

月のうちに星の一點加ふれば目出度文字のはじめなり鳧

○左の句を下句とすれば如何樣の上句を附ても聞ゆるものである。（嗚呼矣草）

といへる歌は昔なりけり　山崎宗鑑

それにつけても金のほしさよ

○ある人の家の前にて元日の朝ワイ〳〵と泣く者ありしがある人

大黑に貧乏神が追出され門の外にてわい〳〵と泣く

主人喜び入りて妻を呼び讀かへして見るに目出度もなし何れが違へるにかとしら

べて見るとたゞ一字の入違ひありしのみ。

大黑が貧乏神に追出され門の外にてわい〳〵と泣く

○雪の降る事數々にて菜の價高かりければ

三文の若葉も雪のたかねにて七十二文棒にふりつゝ　蜀山人

六樹園飯盛の返し

百で買ふ一把の青菜何ならん庭の若草二分三分てる

○ある狂人が濕瘡を煩ひし時詠し國盡しの歌（隨筆見聞錄）

香（加賀）がむさし（武蔵）きの（紀伊）くにするが（駿河）身のひぜん（美濃）是（肥前）てはあはれ（出羽）いきか（安房）ひも（壹岐）なし（甲斐）

○紀伊の國郡を詠る歌（仲文集）

いと（伊都）なが（那賀）き夜はなぐさ（名草）まずあまり（海部）たえず（有田）ひたかん（日高）むろ（牟婁）にすまばや

○樂器を入れたる歌（新拾遺集）

うし、やうし花匂ふ、えに風かよひちりきて人のこと、ひはせず

（草庵集に頓阿法師とあり。）

○草木器の歌（正德三年法王の御製とも云ふ。）

つる（鶴）によ（菊）によし（蒲）開とても龍田川暫し（篠）忍（菱）びし名をすゝ（薄）ぎてよ

まつ（松）ならはとく（楢）歸れかし（柏）みつき（樫）すぎひむろ（杉）も持たぬ深き（檜）山人（桃）（柿）

ひとり（火取）すみ（墨）わかみくる（車）まを（紙）殊更にもつ（琴）ひはいかう（皿）暮しかねけむ（琵琶）

○ゝの字の歌。（其蜩翁草）

（靈元法皇の御製）（十字）

老の身の腰ゝのびたる杖つきゝゝの字のなりの字の如くにて

○武者小路實陰卿（十一字）

かたかなノノ字ノなりノ似たもノノさゝノ葉ノ繪ノすみノ一筆

○風早公長朝臣（十二字）

まるゝゝゝゝゝの字のなりの世の中の人の心のまるきのぞよき

○中院通躬公（十四字）

ゝの宮ゝのちのしのぶゝのちのよのあきのかたみのたねのゝのこりて

○西行法師ある時越後國頸城郡の邊を通行の時、大河に出て便船を乞ひたれども、折節五月雨降りつゞきて水嵩増して渡されず、時に船頭の云ふやう、一首の中に魚十を入れたる歌を詠みたまはゞ渡し參らせんと云ふ、西行は直に（塵埃集）

江鮭　鰤　鱧　鰐　鰌　鰌　鮒　鯖　鰐

あめふりてかはもみづますあちこちとふな人鯉しこさばわたらん

○西行また信州より山路にかゝられた時大勢後より追かけ來りて此法師こそ牛盗人なれと云ふ、西行は、我は左樣の者にあらず、歌修行の旅人なりと申さる、然らば一首の中に十二支を入れて詠みたまへと云ふに（全）

午　未　申　酉　戌　亥子　丑　寅　卯　辰　巳

むまひつじさるとりいぬよそらにいねうしとらぬみへうきなたつみぞ

○唐音を知る歌。（男重寶記）

一は五に四は二にかよひ五は三に二三のときは本座（ホンザ）がへしぞ

一は五とはアイウエオ　五　アン（和）ハ　オン（唐）

四は二とはカキクケコ　二　四　ケン（和）ハ　キン（唐）

五は三とはサシスセソ　三　五　ソン（和）ハ　スン（唐）

二三の本座とはタチツテト　二　三　チン（和）ハ　チン（唐）

ツン（和）ハ　ツン（唐）

引くははぬはぬるはゝぬる入聲の足をきりすて三字中略

（東（トウ）と引くはツンとはれる、珍（チン）とはぬるはチンとはれる。

格（カク）つまりたるを入聲と云ふ。クの如き下の字を捨て唱ふる故に切ると云ふ。

玉（ギョク）三字中のヨの字を畧してキクの如し。）

○諺に云へる筐が歌字盡しとて。（思永齊備忘錄）

すでにかみおのれは下につきにけりみはみなはなれつちはみなつく

○樂所先生の詠める歌。

しはつけりすでにやむのみ上はなれつちとおのれは下のはしつく

○雷除けの歌に　（安津女賀記）

天雲のはなよと迄に祈るかなわけいかづちの神のまに〳〵

○地震の時唱ふる歌　（仝）

棟は八つ門は九つ戸は一つ身はいざなぎの御代にこそ住め

○咳を留る歌。（仝）

思ふぞよ身はいたつきに逢坂の關路も夜は止る習ひを

○大友義鎮は歌道に妙を得たる人なり、ある時後奈良院より難題二つ下されし時詠める　（塵埃集）

雪中早苗

富士うつる田子の浦はの里人は雪の中にも早苗とるなり

螢火灰

夜もすがらともす釜の火も消えて池の眞菰に這ひかゝり鳧

○雪茶山が朝春水の何時も白き羽織のみを着たるを見て

何時見ても色の變らぬ此羽織

春水取あへず

お前の袴幾代經ぬらむ

○大川端に溺死人ありければ

南無阿彌陀ぶつと浮たり沈んだりいづくの人かみづ知らぬ人　蜀山人

○水茶屋の床几に腰打かけしにひしやげければ　（西遊漫記）

差懸けの茶屋の將碁の弱ければひしやと潰れてかくの仕合

○淺草日輪寺に能狂言ありしが見物する者少なかりしかば落首に　（俗耳鼓吹）

狂言に能なし猿が集りて見ざる聞かざる入りがあらざる

○明和九年に安永元年と改號ありしが、さしたる變りもなかりしかば、何者か知らず　（後見草）

年號は安く永しと變れども諸色高直今に明和九

○天保三年十一月琉球人參府、折柄殊の外風邪流行しければ（筆まめ）

琉球の風を車に乘せて來て引く人もあり押す人もあり

酒はかん料理は氣取酌はたぼ狆猫はゞア子は出ぬがよし

借りて來た合羽は黑し雪白し玆は赤坂行くは青山

○和歌十體

一、幽玄體　幽深玄妙で辭氣婉曲、意義深遠の體である、たとへば

侘ぬれば今將同じ難波なる身をつくしても逢んとぞ思ふ　元良親王

有明のつれなく見えし別れより曉ばかりうきものはなし　壬生忠岑

二、長高體　水の長きが如く、山の高きが如く、妙妹のあるが如く、なきが如く、風姿颯爽、神韻縹緲として盡ざるものである、たとへば

思ふ事など問ふ人のなからむ仰げば空に月ぞさやけき　大僧正慈圓

ちつり行く雲に嵐の聲すなりちるかまさきの葛城の山　藤原雅經

三、有心體　感慨ある體で、景物の盛衰を憐み、人事の興廢に鑑み、其情緒纏綿として究りなきものである、たとへば

津の國の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風渡るなり　西行法師

此川の入江の松は老いにけり古き御幸のことや問はまし　坂上是則

四、麗體　霞外の花の如く、雨後の月の如く、流麗俊秀なるものである、たとへば

ほの〳〵と明石の浦の朝霧に島かくれゆく船をしぞ思ふ　柿本人麻呂

ながらへて猶我君を松山のまつとせし間に年ぞ經にける　二條院讃岐

五、辭可然體　理を以て意とすれども妙味を失はず、其妙に到ることは最も難しとする所である、たとへば

大方の秋のねざめの長き夜も君をぞいのる身を思ふとて　家隆朝臣

限りあれば今日ぬぎすてつ藤衣はてなきものは涙なり鳧　藤原道信朝臣

六、面白體　微妙にして悦ぶべき姿あるものである、たとへば

山里に浮世いとはむ友もがなくやしくすぎし昔語らむ　西行法師

いかにせん賤が園生のおくの竹かきてもるとも世の中ぞかし　皇后宮大夫俊成

七、濃體　濃やかにして哀れなる如く而かも悲に陷らず渾融清楚優にあはれなるものである、たとへば

眺侘ぬ秋より外の宿もがな野にも山にも月やすむらむ　式子内親王

散すなよ篠のは草のかりにても露かゝるべき袖の上かは　俊成

八、見樣體　あへて寓意あるにあらず、感慨あるにあらず、眼底に映ずるまゝに詠み出たるものである、たとへば

村雨の露もまだひぬまきの葉にきり立のぼる秋の夕暮　寂蓮法師

かりくらし片野の眞柴折りしきて淀の川瀬の月を見る哉　左近中將公衡

九、有一節體　一種の風骨肅然として圭角あるものである、たとへば

立歸りまたも來て見ん松島や小島のとまや波にならすな　俊成

夢にても見ゆらむ物を歎きつゝ打ぬる宵の袖のけしきは　式子内親王

十、鬼拉體　通首緩滯なく、また疎隙なく、鬼神を辟易せしむるものである、たとへば

ぬれてほす玉串のはの露霜にあまてる光いくよへぬらむ　攝政大政大臣

神風や伊勢の濱荻折りふせて旅ねやすらんあらき磯邊に　讀人不知

○三原侯が畫師の雁一羽のみ畫きしを見て雁は群をなすものなるに一羽離れ飛ぶは國の亂れの兆なりとて立腹せられしかば物外は直に筆を取て（近世禪林言行錄）

初雁やまたあとからもあとからも　物外

徳川武田對立の時武田方は正月飾に殊更に青竹を用ひ之に一句を添へたり。

松かれて竹たぐひなきあしたかな

松平方之を惡くしと思ひ殊更に竹を斜切にして。

松かれて武田首なきあしたかな

（以後斜切の青竹を正月の飾となす例となれりと。）

散ればこそ我にもかゝれ花の雪

関守の聲を越ると眞似て行き

降參がすむと一度にひだるがり

たいてもち宗旨ばかりはまけて居ず

山出しは笑つてやるが藥なり

たゞも行かれぬが無沙汰のなり初め

四疊半家相見が來て茶々をいれ

居候猫や手前もひもじいか

己が股くゞる角兵衛かんしんだ

多辯すな鈴もがらつくので振られ

草臥てとまる宿屋の安時計

先入主となり雪隱で咳拂ひ

愚も使ひやう糸瓜から化粧水

箒さへ曲るぞ人も使ひやう

字て見ても作りのちがふ嫁娘

坐食する世てなしと轉んて食ふ藝妓

辨當に小結びもあり花角力

長を捨て短を取るのは鼻の下

一目視て貫日の知れる輕はづみ

四三四

寸鐵短歌集 終

明治四十四年二月廿六日印刷
明治四十四年三月一日發行
寸鐵短歌集
定價金參拾五錢

著作者 東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地 辻井亨

發行兼印刷者 東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地 大日本圖書株式會社
右代表者 專務取締役 宮川保全

不許複製

發行所 東京市京橋區銀座壹丁目廿二番地 大日本圖書株式會社 振替貯金東京二一九番

各府縣下特約販賣所

松下大三郎　渡邊文雄　編

國歌大觀

大判　全二冊　定價金拾參圓　郵稅金貳拾八錢

本書は碩學本居豐穎、小杉榲邨、木村正辭、井上賴圀、落合直文等五家の監修に係る文藝界の一大寶典にして廿一代集萬葉集新葉集歷史日記草子物語等の和歌全部約五萬首を網羅し長短歌その何れの一句よりも直ちに全歌を引出し作者並に集名を知り得る辭典的絕好の索引書なり

中根淑著

歌謠字數考

全一冊　定價金七拾五錢　郵稅金八錢

本書は我國語の起源獨立歌謠の由來より說起し古今歌謠の字數が五七言に定りたる所以の根本を探究論證したるものなり引證の歌謠は短歌長歌催馬樂等古雅なるものより萬歲歌鳥追節季候聲女ぶしチョボクレに至る迄苟も文字の音節を成す者山歌野唱漏らす所なし

261
903

261
X
703

301292−001−7

特71−709

寸鐵短歌集

辻井享／編

M44. 1

DBC−0001